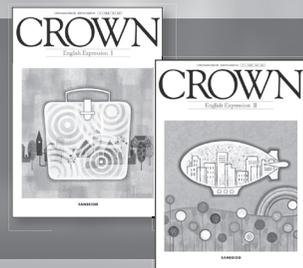


『CROWN English Expression I・II』 の編集にあたって



電気通信大学 松原好次

はじめに

「役に立たない英語」— 英語教材の宣伝が学校英語を批判する際によく使う表現です。さらに、「英語学習に文法は不要」というメッセージとともに、学校英語を切り捨てます。

この宣伝文句を支持する人は多いかもしれませんが。しかし、『CROWN English Expression I・II』の編集に際し、私たちは上記の考え方を振りどころにしませんでした。私たちが出発点としたのは、「文法は自己表現にとっての地下水脈である」という考え方でした。「文法学習を礎として、英語による表現活動に取り組んでほしい」という願いを込めて、『英語表現 I』と『英語表現 II』の編集にあたった次第です。

『英語表現 I』に文法の基礎編を配置し、『英語表現 II』に応用編を追加することによって、文法項目を網羅するという方針をとりました。下記の表に示すとおり、基礎から発展への段階的指導が無理なくできるという点に注目していただけるように、『CROWN English Expression II』の編集方針、題材選択の基準、構成と各パートの到達目標を紹介いたします。

編集の基本方針

『CROWN English Expression I』に引き続き、新学習指導要領の目標に即して、以下の2点を『CROWN

English Expression II』の編集の基本方針としました。

- (1) 日本および世界各地に住む人々の生活や文化を可能な限り紹介することによって、“**自他の文化への目覚め**”を促し、**自己表現への後押し**をする。

自らとは異なる生き方・考え方に触れて、高校生は自分自身の姿を振り返ることができるようになります。そこで、他の国・地域に暮らす人々に関心を抱き、異質な事物を正しく理解できるように導く必要があります。他者を意識することによって、日本の事物を見つめ直す視点が獲得できるものと思われます。グローバル化した世界のなかで、自他の生活や文化を双方向的に理解しようとして初めて、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする」意欲が湧き出てくるものと考えます。英語教育の目標を「グローバル・シティズンシップの養成」に置く考えがありますが、『クラウン英語表現 I・II』の編集の基本方針もそこにあると言えます。

- (2) 大部分の生徒の母語である日本語を**資産 (resource)**とみなし、**英文法を真正面から取りあげる**ことによって、“**ことばへの気づき**”を促し、**自己表現への後押し**をする。

母語 (ENL) あるいは第二言語 (ESL) としてではなく、外国語 (EFL) として英語を学ぶ以上、目標

『CROWN English Expression I』と『CROWN English Expression II』の関係

	文法	Writing	Speaking
『英語表現 I』	基礎編 (本課 16 レッスン)	センテンス・ライティング	スピーチ・プレゼン (基礎)
『英語表現 II』	発展編 (本課 10 レッスン)	機能・概念表現 パラグラフ・ライティング エッセイ・ライティング	スピーチ・プレゼン (発展) ディスカッション・ディベート

言語の仕組みを意識的に把握する必要があります。長い海外勤務歴をもつ私の同僚や友人は、「学習のある段階で、“きちんとした英語”を身につけておかなければいけない」と口を揃えて言います。「事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら情報や考えを伝える」ためには、高校段階で英語の文法を体系的に習得しておかなくてはならないわけです。『CROWN English Expression I』が、文型・時制から仮定法まで、文法の基礎的事項をほぼ網羅するように編集してあるのに対し、『CROWN English Expression II』は、発展的事項を加えることによって重要項目の全体像を提示しています。日本語的発想と英語的発想との格闘のなかで、ことばの面白さや怖さに気づき、“表現したい”という意欲が学習者一人ひとりに芽生えてくることを期待して、編集作業にあたりました。

題材選択の基準

『CROWN English Expression I』の編集の際と同様に、以下の2点を基準として題材を選択しました。

(1) 編集方針(1) に則って、可能な限り世界各地の文化・風俗習慣・言語・科学技術・自然・地理・歴史などに題材を求めると同時に、日本の事物についても英語で表現する際に必要となるであろう題材を選ぶ。

本課レッスンで取りあげた世界各国関連の題材としては、ナスカの地上絵、アンネ・フランクの隠れ家、ハワイの日系人などです。Speakingの課では、ケニアの自然や都市などを取りあげました。また、解説や設問の部分にも、世界各地に関わる例文を意識的に挿入しました。たとえば、異文化理解の観点からは、トルコの食文化に関するエッセイを載せました。自然・地理・歴史の視点からは、干上がったアラル海、ポンペイ遺跡、考古学者シュリーマンなどに触れました。社会問題としては、水不足などを例文のなかに入れてあります。科学技術の側面からは、スティーブ・ジョブズとコンピュータなどについて触れています。

一方、日本については、小笠原のエコツアー、コンビニの夜間営業などを本課の題材として選択しました。Speakingの課は、現代日本のペット飼育事情を取り扱っています。解説や設問のなかにも、伝統的事物だけでなく、同時代的要素を含む語句も意識

的に配しています。たとえば、iPS細胞、介護用ロボット、放射性物質、英語の社内公用語化、『ワンピース』などの語句です。

(2) 編集方針(2) に則った文法学習は、ややもすると味気ないものになりがちなので、知的好奇心を出発点として言語の学習に取り組めるように、“生徒が飛びつきたくなくトピックで、しかも芯のある題材”を選ぶ。

文法学習を中心とするPart 1に配置されたトピック(「日本は水の輸入国?」「笑えばガンが治る?」など)が、高校生の知的好奇心を刺激し、スムーズに言語学習へ移行できるように工夫を凝らしました。つまり、学習者の抱いている常識に揺さぶりをかけてから、イントロ文に潜んでいる文法項目に目を向けさせるという趣向です。

Part 2やPart 3にも、ジョン万次郎の手紙、『バカの壁』などで生徒の関心を喚起し、本課レッスンの導入がスムーズになるように工夫してあります。

構成と各パートの到達目標

『CROWN English Expression II』は3つのパートから成り立っています。各パートの構成・流れ・到達目標は以下のとおりです。

Part 1 基礎編(センテンス・ライティング)

A. 構成

『クラウン英語表現I』(文法の基礎16レッスン)に引き続き、『クラウン英語表現II』では、各レッスン見開き2ページ構成の10レッスンを、文法の応用的項目にあてています。また、文法の定着を図るため、5課ごとにGrammar Profileを設けてあります。

本課の合間に、Speakingのレッスンが2つ(スピーチとプレゼンの基本)設けられています。

B. 英語による表現までの流れ

本課各レッスン見開きの左ページ最上段には、写真の人物・事物の紹介文(約80語)を載せました。授業の導入がスムーズにいくように、Listening ComprehensionのT-F問題を3つ用意してあります。その下にG-file(文法項目の簡潔な説明)、CHECK(確認のための問題)、Expression(追加の例文)、名言コラム、One Point(日本人の英語学習者が誤りやすいポイントに焦点をあてた正誤問題)が続きます。右ページには、Ex-file(空所補充、語

句整序、部分英訳の問題)の後にTry(各課の題材と文法項目を使い、自分の意見を書いたり話したりするコーナー)が配されています。このコーナーでは、下線部分を参考に自由英作文をしたり、ペアでの会話をしたりして、コミュニケーション活動のなかで重要表現の定着を図ります。

Speakingレッスンの場合、見開き左ページにスピーチまたはプレゼンテーションのモデルスクリプトを、右ページに「スピーチ/プレゼンでよく使われる表現」と「質疑応答でよく使われる表現」を載せてあります。そして、右ページの最下段に配されたYour Turnで、自分の趣味についてのスピーチ原稿や訪れてみたい国についてのプレゼン原稿を空所補充形式でまとめます。

C. 到達目標

本課の到達目標は、トピックと関連した内容について、各レッスンの文法項目を活用して、ワン・センテンスで表現することです。またSpeakingでは、スピーチおよびプレゼンの基本を把握したうえで、指定されたテーマについて実際に英語で原稿をまとめることが到達目標になります(Part 2も同じ)。

Part 2 応用編(パラグラフ・ライティング)

A. 構成

本課には、さまざまな機能表現(依頼、許可、忠告、勧誘、賛成・反対など)を各課4ページ構成で8レッスンに配置しました。

Toward Paragraph Writingには、「つなぎ表現」や「言い換え」など、パラグラフを効果的にまとめるためのコツが示されています。Speakingのレッスンには、スピーチ・プレゼンの発展編を配置してあります。

B. 英語による表現までの流れ

本課の第1ページのテキストには、可能な限りauthenticな英文を使用しました。第2ページのF-fileでは、機能表現を含んだlistening comprehensionのCHECKを配置してあります。第3・4ページにかけてEx-fileの大問が5問あります。第5問は、各課の表現テーマ(機能表現)を活用して空所補充することにより、一つのパラグラフが完成されるという仕組みになっています。最後に、自由英作文を課すTRYのコーナーがあります。

C. 到達目標

Part 2本課の到達目標は、トピックと関連した内

容について、各レッスンの機能表現を活用してワン・パラグラフで表現することです。大学入試の出題を元にしたTRYでは、40～80語程度でワン・パラグラフをまとめることを課しています。

Part 3 展開編(エッセイ・ライティング)

A. 構成

Part 3は、本課2レッスンと、新学習指導要領で指定された「ディスカッション」「ディベート」を含む2つのSpeakingレッスンで構成されています。

B. 英語による表現までの流れ

見開き4ページの第1ページにエッセイを載せ、第2ページには例証や要約などに関する表現を含むF-fileの他に、listening comprehensionを用意しました。第3・4ページに設けられた空所補充問題により、エッセイの基本構成を確認できるように工夫してあります。

Speakingレッスンでは、第1・3・5ページにDiscussion/DebateのスクリプトとComprehensionを載せ、第2・4・6ページにExpressions for Discussion/DebateとPracticeを配置し、段階的にディスカッションやディベートに必要な表現を使用できるように編集してあります。

C. 到達目標

本課レッスンの到達目標は、エッセイの構成を把握したり、要約文を作ったりすることです。さらに、Speakingの2レッスンでは、ディスカッションとディベートの流れを具体例で確認してから、Practiceで役割を交替しながら、実際に英語で表現できるようになることを到達目標としています。

おわりに

新学習指導要領は、「伝える能力」の育成を「英語表現」の主眼とすべきであるとしています。しかし、さまざまな条件の下で、「伝える能力」の育成を中心に据えた授業に取り組むことは容易ではありません。そこで私たちは、学習指導要領のねらいと現場の先生方の声をつなぐ架け橋となるような教科書作りを目指そうと心がけました。『CROWN English Expression I・II』は、中学・高校の教員が中心となって編集しましたので、先生方のニーズに合致した教科書ができたのではないかと自負しております。ご一読いただけたら幸いです。